

## イベント取材の夢が消えた後 (その2)

神谷 直亮

厚生労働省が日本国内で初の新型コロナウイルス感染者を確認したと発表した1月16日から4か月余りたった5月25日に、全国ベースで緊急事態宣言が解除された。確かに感染者がピークに達した4月11日から減る傾向にはあるが、まだ流行抑止に成功したと言える段階ではない。日本人特有の清潔志向とマスクを使用する習慣が、第一波の抑え込みにかなりの役割を果たしたと言えそうだが、専門家は「第一波の感染者が少なかったということは、それだけ免疫を持つ人が少ないということになり、第二波では第一波より感染者が増える可能性がある」と指摘する。

筆者は、5月末から6月初めにかけてのこのような環境下で、本稿の執筆を進めており、先月号で述べた3つの生活の変化が今も継続中だ。

まず、1つ目の変化は、新聞や雑誌をこまめに読む時間が増えている。世田谷区のすべての図書館の新聞・雑誌コーナーが閉鎖中なので、近くのコンビニで主だった新聞を買い求めることになり出費がかさむのが悩みだ。雑誌も近くの本屋がオープンしている短い時間帯に飛び込んで、目次を急いで見ては買い求めている。

新聞、雑誌の記事で5月中旬から末にかけて特に目を引いたのは、2件の新型コロナウイルスに関連する記事だ。1件は、5月15日号の「ニューヨークタイムス国際版」に載った「3か月で4回の隔離」というAmy Qin氏の体験談である。アメリカ人記者の彼女は、1月末から4月末にかけての3か月の間に、4回の隔離を経験している。1回目は、1月末に米務省が手配した帰国便で中国からアメリカに戻った時に、サンディエゴで2週間の隔離を余儀なくされる。この時アメリカでは、まだ12人の感染者しかいなかったが、米軍の施設に滞在させられ疾病管理予防センターの担当者のチェックを毎日受けたという。2回目は、2月末にアメリカから韓国経由中国に出張した際に、北京で隔離された上にア

メリカに送り返された。韓国の空港には2時間滞在しただけと主張したが認められず「韓国で新型コロナウイルスの感染が拡大していたというのが表向きの理由で、実際はアメリカ人記者の排斥のようだった」と述べている。3回目は、北京からアメリカに送り返された際に、ロサンゼルス空港に近いモーターで2週間の隔離を強いられている。この時のロサンゼルス空港は「さすがに人がまばらで、かつマスクをしている人が目についた」という。最後の4回目は、4月にアメリカから台湾に出張した際に、台北の小さなホテルで2週間の隔離を経験した。Qin氏は、「この時の台湾の関係者の検温、消毒、健康管理などの対応は、実に素晴らしかった」と、その待遇を詳しく語っており印象に残った。

もう1件は、武漢ウイルス研究所で「バットウーマン（コウモリ女）」の異名を持つ石正麗研究員をめぐる記事である。

5月28日付の日本経済新聞は、「3か月ぶりTVに登場」という見出しで、石正麗研究員が「中国科学院武漢ウイルス研究所が新型コロナウイルスの発生源とする見方を改めて否定した」と伝えた。さらに「昨年12月30日に感染者の検体が研究所に持ち込まれた。我々が知っているウイルスの配列と違うことが分かったので新型ウイルスと命名した」と経緯を説明している。

この内容は、中国国営中央テレビの国際放送組織「中国グローバルテレビネットワーク」のインタビューで述べたものという。同日付の朝日新聞も、武漢ウイルス研究所と石正麗研究員のカラー写真入りで、さらに詳しく解説している。「遺伝子配列は、未知のものだった」という研究所での存在を否定する発言の主旨は、日本経済新聞とほぼ同じだが、石正麗研究員は「フランスの大学で博士号を取り、米国の微生物学アカデミーの会員にも選ばれている」とキャリアを説明し、武漢ウイルス研究所実験室については、「武漢市から南に約30キロの工業団地の一角にある。正門前には警備員が

目を光らし、関係者以外は近づけない」と現場の様子を伝えている。5月26日に撮影されたという武漢ウイルス研究所の外観写真も掲載され臨場感にあふれた記事になっていた。

同じく5月28日付の朝日新聞に掲載された「コロナ国際的な対応欠如、ウイルスハンターの専門家がみる現状」も興味深かった。ウイルスハンターの異名を持つデニス・キャロル（元米国際開発局新興症室長）と同紙との電話による取材記事である。これによれば、「世界人口の爆発的な増加で農地拡大や都市化による森林伐採などが続き、ウイルスを持つ野生動物と人間の距離が近づき感染のリスクが高まっている」という。新型コロナウイルスについては、「SARSは、コウモリ起源のウイルスがつかばフンなどを通じてハクビシンに感染して市場に持ち込まれ、人間に感染したと考えられている。似た出来事が新型コロナウイルスでも起こったと想像できる」と、感染ルートの可能性を示唆している。

日本経済新聞は、翌日の5月29日の「真相・深層」でも、武漢ウイルス研究所と石正麗研究員に関連した記事を載せた。「コロナ研究 国際協力で水」という見出しのこの記事では、米国立衛生研究所が、武漢ウイルス研究所への支援に使われているということで「ニューヨーク在のNPO法人エコヘルス・アライアンスへのコロナウイルス研究資金の提供を突然打ち切った」と伝えた。これに対し、「非合理」「科学への（政治の）介入」「国民の信頼を台無しにする」などの声が上がっており、経緯を明らかにするよう求められているという。一方、石正麗研究員については、米ノースカロライナ大学のラルフ・バリク教授と共同研究に取り組んだというこれまでの経緯に触れ、米中の研究者が国際協力を基盤にコロナ研究を先導してきたという意外な側面に光を当てていた。

雑誌では、文芸春秋6月号に掲載された



写真1 3か月で4回の隔離を経験したという Amy Qin 氏。(出典：ニューヨークタイムス国際版 5月15日号)

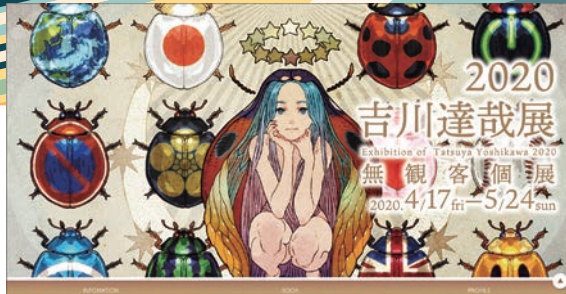


写真2 「2020 吉川達哉展」が、4月17日から5月24日までインターネット上のみで見られる無観客個展として開催された。



写真3 コジマ・ビックカメラ若林店に展示されたソニーのアクションカム。(左「AS300」、右「AS50R」)



写真4 「Be a Hero」をモットーに掲げた GoPro は、ビデオで多種多様な機能を紹介して売り込みに余念がなかった。

「ウイルス VS 日本人」が示唆に富んでいて何度も読み直した。山中伸弥京都大学 IPS 細胞研究所所長と橋下徹元大阪府知事・弁護士の対談記事で、キーワードは「二重人格を持つウイルス」と「ファクター X」だ。山中所長は、「ウイルスが恐るべき二重人格を持つ」という意味について「ほとんどの人は、軽症か無症状で済むのに、数パーセントの人には強かに襲い掛かって命を奪ってしまう」と述べている。また、「ファクター X」に関しては、「日本の感染拡大が欧米に比べて穏やかなのは、日本にはファクター X があるからだ」という認識を示し、可能性として「日本人は、マスクや入浴など清潔意識が高い」「ハグや握手、大声で話すことが少ない」「ハンコ注射として知られる BCG ワクチンの接種」などを挙げている。特に「BCG 接種」という仮説については、裏付けとして「イタリアやアメリカなど感染者が多い国では実施していない」という実態を指摘した。

5月の後半から6月初めにかけては、テレビを見る時間があまりなかった。それでも夕方7時のNHKニュースと、日曜日の大河ドラマは必ず見た。驚いたのは、5月26日のNHKニュースに上述した石正麗研究員が登場しインタビューに答える映像が流れた。また、大河ドラマ「麒麟がくる」については、6月7日の放送回を最後にしばらく休止とのことで残念至極だ。NHKによれば、「新型コロナウイルス感染拡大防止のため4月1日から収録を見合わせていたが、6月30日から再開することになった」という。しかし、放送再開日のアナウンス

はまだない。

テレビの代わりによく見るようになったのは、オンラインアート展である。まず、新宿のGALLERY ElShaddaiで予定されていた「2020 吉川達哉展」が、4月17日から5月24日までインターネット上で見られる無観客個展として開催された。閲覧を試みたら、360度カメラで撮影した「Ladybird Fairy」「The Mouse Girl」「Lovebird」などの作品が次から次へと紹介され結構楽しむことができた。

2月29日から休館中の森美術館も「Stay Home, Stay Creative」をモットーに掲げて、4月28日から6月30日まで期間限定オンライン・プログラムを提供している。「MAM スクリーンオンライン特別上映」「未来と芸術 3D」「アーティスト・クックブック」の3本立てで、「MAM スクリーンアンコール上映」では、チェン・ジエレンの5作品を限定公開した。

東京国立近代美術館で2月26日から6月14日まで開催予定であった「ピーター・ドイグ展」については、美術手帳の「Museum from Home」で詳しく紹介されていた。写真家の木奥恵三氏が撮影した20枚に及び展示作品を見ているといつの間にか引き込まれてしまった。特に、「夜の水浴者たち」(2019年、作家蔵)が印象的であった。スコットランドのエジンバラ生まれのドイグが、カリブ海の島国トリニダード・トバゴで描き上げた作品と思われた。

3つ目の散歩のルートについては、目的のコジマ・ビックカメラ若林店へ行く別ルートを開拓した。若林5丁目の住宅街を突

き抜けるのではなく、途中で烏山川緑道に入り環状7号通りに達するルートだ。この緑道の魅力は、松並木や手入れの行き届いた花壇が道の両サイドを彩っている点に尽きる。

コジマ・ビックカメラ若林店では、散歩時に手軽に使えるウェアラブルカメラの品定めをしている。同店のこのコーナーでは、ソニーの「アクションカム」とGoProの「Hero 8」が競っており、アクションカムは、AS300 (オールマイティモデル)、AS50R (ベーシックモデル)、AS50 (同)の3種が揃っている。6月初めの時点でソニーは、さらにケーブル不要で Bluetooth に対応する Vlogcam 「ZV-1」の予約受付を始めていた。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト